

原理・原則・真理を 当てはめる

〔取材協力者〕

田中悦二氏

（株）朝日新聞社 大阪中之島プロジェクト室 室長補佐

土木出身でありながらも現在は土木とは少し離れた分野でご活躍されている方に焦点を当てる学生企画「土木出身の力とは!?」。第3回は（株）朝日新聞社の田中悦二氏。一見土木との関わりが薄いと思われる会社でどのように土木と関わっているのか、田中氏の秘密に迫ります！

大手不動産会社が 朝日新聞社という選択

——朝日新聞社に入社された経緯を教えてください。

田中——神戸大学の土木工学科で土木を学んだ後は、土木や建築にかかわる仕事をしたいと思っていました。土木へのかわり方として、発注側に立ち、このようなものをつくりたいと伝える役割が私には向いているのではないかと考えました。そのため、これらを実現できる不動産会社を志望していました。幸いにも複数の大手不動産会社

から内定もいただけていました。その

ような中、就職について朝日新聞社の販売部門にいた部活の先輩に相談に乗っていただいたことがあったので

す。その話の中で、朝日新聞社自身が不動産部門をつくってビルの建て替えを行い、テナントを誘致することで会社の収入の安定化を図ろうとする意向があることを知りました。朝日新聞社の不動産部門と聞くと、大手不動産会社と比較して物足りないと感じてしまうところもあったのですが、会社の公器である朝日新聞社で自分のやりたい不動産の仕事ができるのは



田中悦二氏
TANAKA Etsuji

神戸大学工学部土木工学科を卒業後、1990年に（株）朝日新聞社の不動産部門に入社。新聞記者、購買部門を経て、2008年に中之島プロジェクトの開始と同時にプロジェクト室へ異動。2012年に完成した中之島フェスティバルタワーおよび2017年3月に竣工予定の中之島フェスティバルタワー・ウエスタの建設に携わる。

理想的だと考え、朝日新聞社を第一志望として受けることに決めたのです。ジャーナリストを目指して志望する学生が多い中、不動産部門を目的に挑戦した学生はおそらく私だけだったと思います（笑）。

公共の一財産としての 中之島プロジェクト

——現在、中之島プロジェクト室配属に至るまでの経緯を教えてください。

田中——入社以降、2002年までは朝日新聞東京本社の不動産部門で不動産に関わる仕事をしていました。不動産部門では、朝日新聞社が所有していた賃貸ビルの管理、新聞販売店、取材拠点といった建物の建て替え、用地取得などを行っていました。その

後、上司に「せっかく新聞社にきたか

らには記者の仕事もやってみたらどうか」と言われ、2004年まで新聞記者を経験しました。新聞記者として横浜総局で神奈川県内の事件や事故、県政、まちネタなど県版の取材をしました。2005年から3年間は購買部門で、パソコンや新聞を発行するのに必要な機材の購入などの仕事をやっていましたね。そして不動産部門に戻ったのですが、中之島プロジェクト

が始まると同時に大阪に転勤し、プロジェクト室に所属しました。

——中之島プロジェクトの概要と業務内容を教えてください。

田中——中之島プロジェクトとは、朝日新聞社が所有する3棟のビルを取り壊し、新たに200m級の超高層ビル2棟を建設するプロジェクトです。



図1 2017年4月竣工予定の中之島フェスティバルタワー・ウエスト

ビルの建て替えと同時に、地下鉄の連絡通路や地域の防災拠点となる空間を確保することで容積率の割り増しを獲得することができ、大阪市都心部に日本最大級となるツインタワーの建設が可能となりました。また、2012年に竣工した中之島フェスティバルタワー内には、以前からこの場所に存在していたフェスティバルホールを新装して運営しています。50年間大阪の人びとに親しまれてきたホールを再生させることで、ビル床の割り増しを受けたという経緯もあるのです。なお、フェスティバルタワーの全37階のうち、朝日新聞の大阪本社として使用しているのは9階から11階の3フロアのみで、他のフロアはオフィスや商業施設、保育所などに貸し

ています。多くのテナントを誘致することで人を集め、この地域の活性化につなげていこうと考えています。——印象に残っているエピソードを教えてください。

田中——現在建設中である中之島フェスティバルタワー・ウエストの33階から上層階に大手高級ホテルをいれる計画が、見解の相違により最終合意に至らなかったことです。計画が破綻しても建設を止めることはできないので、タワー建設は進行させた状態で次のパートナーを探す必要がありました。最終的にはコンラッドホテルに入ってもらうことに無事決まりました。交渉が失敗するのは辛かったですし、次のパートナーを探すのも大変でした。

また、フェスティバルタワーの建設に關して、費用が予算を数百億円上回り、それを切り詰める作業も大変でした。コストを上げる原因を

突き止め、コストを抑える手段を協議することで、無事目標コストに収めることができました。この事業を予算内に収めることで社内の手承をもらっていたので、それを実現するためにやるしかありませんでした。電話帳のように分厚い見積書を一つひとつ確認するのは大変な作業でしたが、なかなか合意で乗り越えました。

原理・原則・真理を当てる

——「土木出身の力」についてどのように考えられていますか。

田中——「水は高いところから低いところに向かって流れる」。学生時代の実験や演習がうまく行かずに悩んでいたとき、このシンプルな法則を本当の意味で理解したとき、目の前がパツと開けた気がしました。物事をシンプルに考えて、原理・原則・真理について自分でしっかり見極めて進んでいくという考えが土木時代に培った最大の成果・力です。プロジェクト進行中に予算内に収まらない場合でもどのようにしたらコストを抑えることができるのか、原因はなにかをとことん追求し、

原理・原則・真理を当てるはめて考えれば



写真1 中之島フェスティバルタワー・ウエストの建設現場にて。中央が田中氏

ば落としどころが絶対に見つかるとは思いません。複雑な物事も極力シンプルにとらえて、回答を探すべきだと土木時代に思ったことが、私が携わったどんな仕事でも直接生きているのではないかと感じています。

——土木を学んでいる学生・若い技術者にメッセージはありますか。

田中——土木だからどうこうということには特ありませんが、せっかく学んでいるのだから、土木って何だろうということについてはずっと考えておくといいと思います。土木の勉強で自分は何を学んでいるのだろうか、土木を通じて社会人としてどのように仕事をしていきたいか考えておくことは非常に大事だと思います。(担当編集委員：若尾晃宏、水越湧太)